



上峰町立上峰中学校だより

ちんぜい

No.7

発行日：令和8年10月 2日

発行者（文責）：校長 永田康子

学校教育目標：心豊かに たくましく生きる生徒の育成 ー自ら考え、判断し、行動する中学校生活を通してー
生徒会スローガン：オリジナル～全員の個性が輝く学校へ～

10月を迎え、朝夕には秋の気配を感じるようになりました。学校では、文化発表会や合唱コンクールに向けた準備が始まり、生徒たちが話し合ったり、役割を分担したり、練習したりする姿が見られるようになっていきます。一つのことをみんなでつくり上げることは、決して簡単ではありません。「こうしたい」という思いが違うこともあります。練習への温度差が生まれることもあるでしょう。思うように進まず、互いに不満を感じることもあるかもしれません。しかし、学校行事の価値は、当日の出来栄だけにあるのではないと考えています。

自分の考えを伝えること。相手の考えを聞くこと。意見が違ったときに折り合いをつけること。自分の役割を果たすこと。そして、誰かが困っているときには力を貸すこと。そうした一つ一つの経験の中に、教室での学習とはまた違った大切な学びがあります。特に合唱は、一人だけが上手に歌っても完成しません。自分の声を出しながら、同時に周りの声を聴く必要があります。それぞれの声が違うからこそ、互いの声を聴き、合わせることで一つの響きが生まれます。これは、学校生活そのものにも通じるように思います。

文化発表会や合唱コンクールまでの時間には、きっといろいろなことが起こるでしょう。その一つ一つも含めて、生徒たちにとって大切な学びの時間です。当日の発表だけでなく、そこに至るまでに、生徒たちが仲間とどのように関わり、何を考え、どんな役割を果たしたのか。その「過程」にも目を向けながら、私たちも生徒たちの成長を見つめていきたいと思います。

三年生から二年生へ



次期生徒会長選挙に向けた活動が始まりました。校内では、これまで学校の中心となって活動してきた三年生から、少しずつ二年生へとバトンが渡される時期を迎えています。

二年生の姿にも少しずつ変化が見られるようになりました。これまでは三年生についていく立場だった生徒たちが、「次は自分たちの番だ」ということを意識し始めています。学校行事や日々の委員会活動などでも、自分たちが学校を支える立場になることを考え始めているように感じます。生徒会長選挙は、一人のリーダーを選ぶためだけのものではありません。「これから、どんな学校にしたいのか」「そのために自分たちに何ができるのか」を、生徒一人一人が考える機会でもあります。これまで、生徒会役員を中心に「自分たちの学校は、自分たちでつくる!」ことを大切にしてきました。しかし、この言葉を実現するのは、生徒会長や生徒会役員だけではありません。よりよい学校をつくるために意見を出す人、それを聞く人、話し合いに参加する人、決まったことを実行する人。すべての生徒が学校づくりの一員です。リーダーを支えるフォロワーの存在も、学校を動かす大切な力になります。

三年生はこれまで、さまざまな場面で学校を支えてきました。うまくいったことばかりではなかったでしょう。迷ったり、意見がぶつかったりしながら、自分たちなりの答えを見つけてきた経験そのものが、後輩へ渡す大切な財産です。そして二年生には、三年生がしてきたことをそのまま引き継ぐだけでなく、「自分たちはどんな学校をつくりたいのか」を考えてほしいと思います。

バトンを受け取るとは、同じことを繰り返すことではありません。受け継ぐべきものを大切にしながら、新しい考えを加え、さらに次へとつないでいくことです。これから二年生が、自分たちなりにどのような学校づくりを始めるのか。その姿を楽しみにしています。

たすき

襷をつなぐ、その先に

10月1日(木)、吉野ヶ里歴史公園において、神埼地区・三養基地区中学校駅伝大会が開催されました。本校からも選手たちが出場し、これまで積み重ねてきた練習の成果を発揮していました。

駅伝は、一人で完結する競技ではありません。自分の走りが仲間につながり、一本の襷がゴールまで運ばれていきます。苦しくても少しでも前へ、少しでも早く仲間へ襷を渡そうと懸命に走る選手たち。その姿に向けて、仲間からは絶えず応援の声が送られていました。一生懸命に走ることも、一生懸命に応援することも、同じチームの大切な役割です。もちろん、この日の頑張りは大会当日だけで生まれたものではありません。日々の学校生活と両立しながら練習を重ねてきた時間があります。思うように走れない日もあったことでしょう。それでも練習を続け、大会当日までたどり着いたこと。その積み重ねにこそ、大きな価値があると思います。

そして今回、走りとは別に、とてもうれしい話を聞きました。本校生徒の挨拶の素晴らしさを、他校の先生方から褒めていただいたのです。さらに大会終了後、本校の生徒たちが最後まで会場の後片付けをしていたことも聞きました。大会では、順位やタイムという目に見える結果が残ります。しかし、人の素晴らしさは、それだけで測れるものではありません。気持ちのよい挨拶ができること。仲間を心から応援できること。そして、自分たちの出番が終わった後にも、会場のためにできることを最後までやること。誰かに言われたからではなく、自然にそのような行動ができることを、私はとてもうれしく思います。

一本の襷をつないだ選手のみなさん。そして、選手を支え、応援し、大会を支えた生徒のみなさん。みなさんの一生懸命な姿と行動を、校長として誇りに思います。



校則を見直すということ

本校では、校則検討委員会を中心に、生徒たちが学校生活のルールについて考えています。

「校則を見直す」と聞くと、「これまで禁止されていたことができるようになる」「校則が緩くなる」と捉えられることがあります。しかし、本校が目指している校則の見直しは、単に決まりを減らしたり、自由を増やしたりすることではありません。大切なのは、「なぜ、この決まりがあるのだろう」「今の学校生活に本当に必要なのだろうか」と、その目的や意味を考えることです。必要性を説明できない決まりや、時代や社会の変化に合わなくなった決まりがあれば、見直していく必要があります。一方で、自分にとって窮屈だからという理由だけで変えるものでもありません。

生徒たちの話し合いでは、どうしても髪型や服装など、自分たちにとって身近で分かりやすいことに関心が集まりがちです。しかし、校則を考えると忘れてほしくないことがあります。それは、学校にはさまざまな考え方や感じ方をもった人が一緒に生活しているということです。

「自分がしたいか、したくないか」だけではなく、「みんなが安心して生活できるか」「学ぶ場所としてふさわしいか」「誰かが困ることはないか」という視点から考えることが必要です。自由が広がるということは、その分、自分で考え、判断し、自分の行動に責任をもつ場面が増えるということでもあります。

私たちが校則の見直しを通して育てたいのは、「決まりがあるから守る」生徒ではなく、なぜ必要なのかを考え、必要なルールについては互いに納得しながら守り、必要がなくなったものについては話し合っ変えていくことのできる生徒です。校則の見直しは、ゴールではありません。生徒たちが「自分たちの学校生活を、自分たちでよりよいものにするとはどういうことか」を考える学びの機会です。

保護者の皆様にも、校則が「厳しくなったか、緩くなったか」だけではなく、その話し合いを通して子どもたちが何を考え、どのような力を身につけていくのかという視点から、見守っていただければと思います。